

太宰治の「雀こ」

山内 祥史

太宰治の第一短篇小説集『晩年』に、「雀こ」という小品が収められています。津軽の童戯のありさまが、津軽ことばで綴られている作品です。この作品は、川合勇太郎編著『津軽むかしこ集』（東奥日報社、1930年8月20日付発行）所掲の「烏と椽の実」と内田邦彦著『津軽口碑集』（郷土研究社、1929年12月20日付発行）所掲の「雀こ欲しい」とを素材として創作された作品と考えられます。「雀こ欲しい」には、つぎのような言説がみられます。

○児童等二群に分れて一方が先づ唱ふ。

- (甲)雀こ欲しい (乙)どの雀欲しい
 (甲)中の雀欲しい (乙)羽こ無えで与られね
 (甲)羽こ与るはで飛で来い (乙)川にかつて飛ばれね
 (甲)河の橋跳ねて来い

かく言ひ了りて小児は反対側に走りゆく。

「雀こ」は、この「雀こ欲しい」の言説を手がかりとしてそれに従いながら、「児童」たちの行為や遊びの奥にある「悲しさ」を、イメージとして提示し構築することを目指した作品です。梗概を紹介すると、つぎようになります。

春になり、童たちが、広い野原で二組に分かれて遊んでいます。一方が「雀、雀、雀こ欲うし。」と歌うと、いま一方が「どの雀欲うし？」と歌います。雀こ欲うしと歌った方の童たちは、うち寄り相談した挙句、タキがいいと、タキをもらうことに決めて歌います。「右りのはづれの雀こ欲うし。」タキはいつでも「一ばん先に欲しがられ」、マロサマはいつでも「おしめにのこされる」のです。タキは、よろづよの「一人あねこ」で勢よく育ったので、ひどい雪の日でも、林檎よりも赤い頬ぺたを吹きさらしにしてどこへでも行けました。マロサマは寺の坊主で、体つきが細く貧弱で、皆が軽蔑していました。マロサマが着物をはだけて歌っています。「雀、雀、雀こ欲うし。」これでマロサマは二度も売れ残っています。「どの雀、欲うし。」「なかの雀こ欲うし。」タキが、マロサマをにらみます。マロサマは、おっとりした声で、また歌います。「なかの雀こ欲うし。」タキは、童たちになにやらこちょこちょと言いつけます。童たちは、それをきいてにやにや笑いながら歌います。「羽こ、ねえはで呉れられね。」マロサマが歌います。「羽こ呉れるはで飛ん

で来い。」「杉の木、火事で行かえない。」「その火事よけて飛んで来い。」「川こ大水で、行かえない。」「橋こ架けて飛んで来い。」こんどはタキがひとりで歌います。「橋こ流えて行かえない。」マロサマは、ついに言葉に窮し泣き泣き念仏を唱えて、皆が笑います。タキは、荒々しく「マロサマの愛ごこや。わのこころこ知らずて、お念仏。あはれ、ばかくさいぢやよ。」と、雪だまをにぎってマロサマにぶつけます。おどろいたマロサマは、泣くのをやめて、広野を逃げて行きます。

「雀こ」は、太宰治が繰返し描き続けた、人間実存の悲劇を示した作品です。孤立の悲しみに堪えながら、ひたすら「タキこ欲しいが」マロサマ。拒まれ笑われ、深々と傷つく魂。悲しみを堪え「愛の表現の困難」に苦しみながら、なおも訴えるマロサマ。だが「人魂みんな眼こおかなく燃やし」拒否するタキ。この残忍さ。魂を侮蔑して顧みない無神経さ。ついには、タキのぶつけた雪だまが右肩で砕け、マロサマのひたすらな思いも砕け散る。この食いちが。埋めがたい深淵の物語であります。女性と男性とは、なぜこのように食いちがうのか。太宰治が、その作品で訴え続けているのは、このことであつたように思われます。

(学長、総合文化学科教授)

WOMEN AND MEN

J. Zeugner

For the past five years I have been connected to an on-going oral history project of women engineers/scientists in the United Kingdom. Since in the U.K. science/engineering is an extraordinarily gendered profession, it would seem that women who enter the field and flourish there in fact regender themselves. And of course that is the explanation offered by males for the presence of women in engineering. "They were all tomboys to start with," explained the headmaster of an elementary school to me, "It's basically a biological thing." The project has been a wonderful entry into the issue of gender/role/self definitions within a different culture. I mention this oral history project at the outset only to reference the data from which I may now

speculate a bit about gender/role/self issues in the U.K. and in Japan.

I have spent three three-month stays in the U.K. and three two-year stays in Japan, but I freely admit my Japanese data is mostly impressionistic and anecdotal. Two of the stays in Japan occurred before the oral history project in the U.K. began, and so I was not cognizant of, nor much interested in, gender/role/self issues during those times. Nonetheless I will make a few dubious pontifications on the matter.

At first I was struck that these two island societies, Japan and the U.K., had relegated women to such an isolated status. And I suppose anyone might be struck by the degree to which male-only preserves stream through the two societies, whether it is in the vaguely homoerotic socializing structures in the U.K. (the Worshipful Company of Engineers for example had only three women members out of its 215 list, and those seldom came to Company functions since the formal dress of the Livery was not suitable for female forms), or the hierarchical corporations of Japanese life and their attendant after hours frolics—such earnest male bonding/clutching enterprises. But as an American I was somewhat amazed at the demarcations of those male-only zones. But of course isolation can be a matter of perspective.

My impression more recently is that Japanese women enjoy far more actual power than British women. And that's an interesting point since British women seem to have more career opportunities than Japanese women; over half the British doctors are women, for example. But in terms of power over substantial portions of daily living Japanese women seem to have enormous control; indeed one wonders where autonomy for Japanese males is ever exerted—at work they deliver decision-making to negotiated consensus or dictates from the top; at home they deliver, apparently, decision-making to their wives/mothers. Maybe Japanese males have discovered, or at least believe, that autonomy is a rather wan delight anyway.

Whereas in Britain the bias/limitation seems

to be against gender, i.e., against females, in Japan the bias seems to arrive because of such clear role demarcations. Roles are so clearly perceived to be all-encompassing and limiting, the issue of their gendering does not seem to be significant—at least on the conceptual level. One can hardly be blind to the observation that certain roles, rigidly prescribed as they are, are limited to gender, but I nonetheless have the impression that gendering of roles may have a possibility of flexibility that I don't see in the U.K. And I say that having experienced here in Japan the extraordinary awkwardness of being male and dropping off and picking up my five-year old at a nearby *yochien*. Clearly the role of *yochien* mother being played by a male poses enormous problems of acceptance, but I remain convinced that at bottom in Japan the equation is role=self and that gender=self is very much a fifth or sixth level priority. If that is true, the male *yochien* mother is possible conceptually in ways that seem quite alien to my admittedly rather limited experience of the U.K. In that sense Japan appears to me to be far closer to Southeast Asian approaches to gender than to western approaches. No one doubts for a minute that it is women, despite all manner of public subservience, who run the Philippines and Thailand, for example.

And it seems perfectly clear that Japan's export mania, and internal maze of distribution channels and bureaucratized inefficiencies could not last a month without the continuous cooperation of women who accept their rigidly cast roles, a point made in another context by Cynthia Enloe in her splendid book, *Bananas, Beaches, and Bases*. It is precisely that acceptance that seems demographically at least to be shifting in very significant ways. As marriages get delayed or avoided, as child bearing gets delayed or avoided, it seems Japanese women have opted for new roles or at least different possibilities, without ever having to confront or proclaim that issue directly. A very Japanese solution. One worth exploring and discussing with the very front lines of that change, Kobe College students. (総合文化学科客員教授)

『女と男』

島井 哲志

想像してみてください。テレビゲームに夢中になっている子どもがいます。目は真剣そのもの、手は巧みにコントローラを操って、次々と難関をクリアしていきます。想像できましたでしょうか？

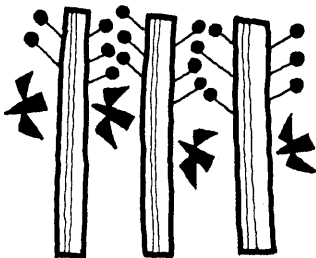
さて、あなたは、この子どもを女の子だと想像しましたか？それとも、男の子だと想像されましたか？

小学生のテレビゲームについての調査では、男の子の71.3%がテレビゲームで週1～2回以上遊ぶのに対して、女の子は37.8%の子どものしか遊んでいません。今までで、最高何時間遊び続けたかという質問では、女の子は3.7%が3時間以上と回答したのに対して、男の子は実に19.3%が3時間以上遊んだ経験があります。

それどころか、どうやら幼稚園時代から、男の子はテレビゲーム遊びにとりつかれはじめてののに対して、女の子はその割合が少ないようです。3歳児クラスの男の子の11.1%が1日1時間以上テレビゲームで遊ぶのに対して、女の子は3.8%です。

以前、任天堂の方とお話する機会があった時に、はじめから、男の子をターゲットにして、ゲームソフトを開発しているのかとたずねたことがありました。その方は、全然そんなことはないと言っておられましたが、その後、女の子を意識して開発したのではないかと思えるようなソフトが発売されました。企業としては、市場を男の子だけに限定しないほうが望ましいのだと思います。

コンピュータ教育をされている人にきいてみると、教育に際しては、特に性別による違いを意識しないとのこと。ということは、女の子は変な時間つぶしに引っかけにくいということでしょうか。テレビゲームを子どもと一緒に遊ぶのも、圧倒的にお父さんなのです。
(人間科学科助教授)



『女と男』

郭 崇 敬

日本語に「花道」と言う言葉があります。これは読み方によって、その表すことが違ってきます。「かど」と読むときには、「生け花の技術」を表しますが、「はなみち」と読んだ場合には「歌舞伎」と関ってきます。

「はなみち」は歌舞伎の舞台の延長として客席を縦断して設けた一本の道で、俳優の出入りする道であり、相撲で力士が土俵にあがる時に通る道も「はなみち」と呼ばれています。周知のように、「かど」は女性が大いに活躍している分野で、言わば「女の世界」とも言えるでしょう。そして「はなみち」は言うまでもなく、「男の世界」であり、「華やかな道」というニュアンスが含まれています。この「はなみち」と言う歌舞伎用語は、ある人が歴史や政治の舞台に栄光に満ちて登場するか、退場していくかの時にも使われています。よく「男の花道」と言われるように、「はなみち」は、言わば「男の世界」とも言えるでしょう。この「男の世界」とも言われる「はなみち」にも、近年は有能な女性が入り出すようになりましたが、その数はまだまだ少ないです。

日本も中国も遠い昔はかつて「女の世界」である「母系社会」がありましたが、いつの間にか、男の世界となり、女性は「服従」と言う位置に追いやられ、「三従四徳」を強いられました。そして、それを守ることを女性の美德として称えられてきましたが、近代に入り、日本も中国も女性の社会進出が多くなり、経済的に独立するようになりました。日本の女性たちはすでに社会のさまざまな分野でめざましい活躍をするようになり、中国の女性も「鍋台転」（台所仕事に明けくれる）から解放され、社会で活躍しています。

現在では、多数の一般の女性（普通の女）が優秀な女性に引き続いて、さらに多くの社会分野で活躍を始めるようになり、「普通の女」の出番が来、「はなみち」を歩んでいます。女にとって「はなみち」を自ら勝ちとるか、時の流れに身をまかせ、ひたすら待つかと言う問題があり、男にとっては、女がはなみちを進むことに理解し、支えていくかと言う問題があります。女と男は互いに理解しあい、支持しあい、「男だけの花道」でなく、「女だけの花道」でもない、「女と男の花道」を作っていかなければならないと思います。なぜなら、明るい社会づくりは女と男の共同の任務であるからです。
(客員研究員)

AWI 執行委員会報告

本城 智子

のびのびになっていた AWI (The Asian Women's Institute) 執行委員会が、やっと1994年2月24日～26日、Kinnaird College for Women (Lahore, Pakistan) で開かれることになり、小玉学長に代わって出席した。インドから出席予定の2名はvisaがでず欠席。アメリカからの委員の到着を待って、半日遅れで、議事日程を大幅に変更して始まった。

まずMrs. Grayから、前任者との事務引き継ぎ上の問題、募金の状況等、詳細な報告を受け、AWIの「会計」の「苦しさ」を知り、予定の諸行事について再検討、次のような結論に達した。

1. a. 3年ごとの大会については、
Educational Conferenceを取りやめ
b. 学長会議を来年度上半期に開催し、AWIの直面している問題、将来について討議する。
2. 機関誌 *Asian Woman* は暫く休刊
(購読者には事情説明の手紙を)
3. Leadership/Faculty Exchange Programe は予算が維持されているので実施する。
テーマは Women and the Media、訪問先はインド・パキスタン(バイルートは経費の関係で割愛)

その他、フィリピンの Silliman Univ. の加盟承認、来年の学長会議まで Dr. Mira Phailbus を Acting President に推すこと、Lahore でもドルだての銀行口座を開くこと等が議された。

AWI の経済的基盤が北米での募金(殊に諸教会を通しての)に依存している事情を知り、Liason の Mrs. Gray の尽力に感謝するとともに、次の学長会議が良き実を結ぶことを願って散じた。

なお、Leadership/Faculty Exchange Programe は、来年3月に行われることに決まり、本学からも学生1名を送ることになっている。

(女性学インスティテュートディレクター、英文学科教授)



AWI 執行委員会メンバーとともに
(筆者：左から2人目)

1994年度前期活動報告

ワークショップ 5月20日(金)

「恋愛の物語」

難波江和英氏(神戸女学院大学英文学科助教授)

[出席者：60名]

座談会 5月27日(金)

「バングラデシュの母親たち」(英語)

ミナ・マラカール氏(バングラデシュ：女医、寺小屋教育・母親教育の普及に携わる。アジアキリスト教育基金の招聘により来日。)

[出席者：28名]

講演会 6月29日(水)

「On the Black Womanist Self in my Work」

ポール・マーシャル氏(アメリカ：女性作家、ヴァージニア・コモンウェルス大学教授)

[出席者：72名]

講演会 7月6日(水)

「フェミニズムを超えて一女性の生き方再考」

北村春江氏(芦屋市長)

主催：神戸女学院大学大学院文学研究科社会学専攻院生会

協賛：神戸女学院大学女性学インスティテュート他

[出席者：40名]

一ディレクター就任(再任)一

1994年4月1日より、女性学インスティテュートディレクターとして、文学部英文学科の本城智子教授が就任(再任)。任期は2年。

図書・資料をご利用ください

女性学インスティテュートでは、女性学関係の図書および資料の閲覧・貸出を、下記の要領で行っています。

◎開室時間 月～金 8:30～16:30

(但し、11:45～12:45は除く。)

◎閲覧 開室時間中は自由にご覧ください。

◎貸出期間 2週間

◎貸出冊数 8冊まで

※ 閲覧・貸出希望者は、デフォレスト館3階
303号室(D-303)まで

1994年度女性学インスティテュート編集委員

原田園子、本城智子(委員長)、飯田正紀、井上紀子、内田樹(ABC順)

編集・発行：神戸女学院大学女性学インスティテュート

〒662 西宮市岡田山4-1 ☎(0798)51-8545